

## 人物紹介

## 砂原 茂一

国立病院機構東京病院 片山 透

名誉会員<sup>すなほらしげいち</sup>砂原茂一先生が昭和63年6月15日に脳溢血で亡くなられてから（享年80歳）、この6月で23年になる。日本結核病学会誌（第63巻8号）には先生の御略歴と、当時の国立療養所東京病院長 芳賀敏彦先生による追悼記が載っている。

先生は明治41年5月16日に三重県で出生、三重県立上野中学校から名古屋の第八高等学校、次いで昭和8年3月に東京帝国大学医学部医学科を卒業、第三内科の医局長の後、昭和18年春から満州開拓青年義勇隊教監、吟爾浜中央病院長を務められ、1年後の昭和19年8月1日に傷痍軍人東京療養所長となられた。翌年には日本は敗戦、終戦となり、12月には傷痍軍人東京療養所は厚生省に移管、国立東京療養所と改称、さらに昭和37年1月4日、同じ清瀬町（当時）にあったもう一つの国立療養所清瀬病院との統合により国立療養所東京病院と改称された。先生はその間ずっと実に32年余にわたって病院長を務められ、昭和51年12月に68歳で退官された。傍ら東京大学非常勤講師も委嘱されておられた。

戦争中、また戦後の食糧難の時代、あるいはその後の国立療養所の統合という大問題、さらに結核入院患者の減少に伴う病床数の削減と診療科目の転換、そこから生じる職員の定員数削減と労働組合との団体交渉など（先生いわく：統合のキシミ）、ご苦労の種は続いた。

しかしそれにめげることなく、隣接する結核予防会とともに、諸外国から結核といえ日本では清瀬と言われたほどに、結核病学の進歩に尽くされた。戦後間もなく普及し始めた化学療法の当初の試行錯誤の時代、昭和28年には厚生省の結核実態調査協議会委員を、昭和32年には日本結核病学会幹事を委嘱され、昭和49年には第49回日本結核病学会総会長を務められた。また昭和32年から厚生科学研究・国立療養所化学療法研究会を主催、これは後進に引き継がれた。イソニアジド代謝の人種差の研究も注目された。内科、外科を問わず院内の数多くの人たちが先生をお手伝いし、清瀬雀に「七人の侍」と噂された医師団もある。また抗結核薬の開発、気管内麻酔機の輸入、輸血療法の普及に支えられた外科療法の進歩にも尽力され、日本胸部外科学会の創立にあたっては



評議員を委嘱された。

傷痍軍人東京療養所の初期の頃の病院参観者の署名簿が今に残っているが、その中には懐かしい全国の先達のお名前が載っている。かつて京都大学の人見滋樹先生がそれを見たいと来院され、「歴史を感じますなあ」とおっしゃられたこともあった。

原稿を書くことは厭われず、入院患者向けの月刊紙「療養便り」には、様々な記事を島村喜久治副院長と交替で執筆された。新聞社などに対しては、面接、口頭での取材は拒否され、原稿ならいくらでも書くと応じられた。記者による曲解を避けられたのである。

しかし砂原先生は、結核医療の領域ばかりでなく、あと二つの大きな仕事をなさった。

その一つはわが国にリハビリテーション医学を導入されたことである。先生は、当時の医学部出身だからドイツ語、英語は当然としても、フランス、イタリア、さらにオランダ、ベルギーの論文も読解され、外国文献を精力的に読破しておいでだった。フンボルト留学志望者の試験委員などもされたことがある。先生はそれより前、

昭和16年5月26日付で文部省在外研究員を命ぜられ、ドイツ医学の研修に赴くはずであった。しかし国際情勢の緊迫から出発できず、その翌月に独ソが開戦したのである。とにかくその語学力を武器に、肺結核・呼吸不全の呼吸指導、鎮咳・排痰療法、胸部外科手術後の呼吸指導などを、手始めに院内で実行した後、政府を動かし、昭和38年5月にはわが国最初のリハビリテーション学院の併設となった。開校当時はこれを担当する教員は国内には少なく、アメリカ、イギリス、オーストラリア等の外国人教師ばかりで、ややこしい問題が起きると手紙でやりとりしておいでだったようだ。昭和38年秋にはイタリア、オーストリア、フランス、オランダ、イギリス、アメリカ、カナダの各国の理学療法士・作業療法士の養成学校の実態調査・研究の目的で出張を命ぜられておられる。

学者として先生がもう一つ始められたのが、臨床医学と基礎薬理学の中間に位置する、人間における薬理学的研究（WHO）と言うべき臨床薬理学である。薬理学や製剤学、実験動物の研究所、応用数学者などを糾合して、まず1970年に臨床薬理研究会として始まり、5年後には臨床薬理学会と改称した。砂原先生によれば、これは人体薬理学と臨床試験ならびにその関連領域を含むものである。臨床薬理学の詳細はその専門書を参考にされたい。

医局会議では、黙って貧乏揺すりをしながら皆の意見を聞いておられ、最後に短くご自分の考えを述べられた。美食家で、お酒もお好きだったが、医局旅行などでどんなにお飲みになっても、寢床の中でまた洋書を読んでおられたのは、人並みではなかった。